岩波ブックレットNO.388

ほんとうの豊かさとは

——生活者の社会へ——

暉峻淑子

刊行のことば

今日、われわれをとりまく状況は急激な変化を重ね、しかも時代の潮流は決して良い方向にむかおうとはしていません。今世紀を生き抜いてきた中・高年の人々にとって、次の時代をになう若い人々にとって、また、これから生まれてくる子どもたちにとって、現代社会の基本的問題は、日常の生活と深くかかわり、同時に、人類が生存する地球社会そのものの命運を決定しかねない要因をはらんでいます。

十五世紀中葉に発明された近代印刷術は、それ以後の歴史を通じて「活字」が持つ力を最大限に発揮してきました。人々は「活字」によって文化を共有し、とりわけ変革期にあっては、「活字」は一つの社会的力となって、情報を伝達し、人々の主張を社会共通のものとし、各時代の思想形成に大きな役割を果してきました。

現在、われわれは多種多様な情報を享受しています。しかし、それにもかかわらず、文明の危機的様相は深まり、「活字」が歴史的に果してきた本来の機能もまた衰弱しています。今、われわれは「出版」を業とする立場に立って、今日の課題に対処し、「活字」が持つ力の原点にたちかえって、この小冊子のシリーズ「岩波ブックレット」を刊行します。

長期化した経済不況と市民生活、教育の場の荒廃と理念の喪失、核兵器の異常な発達の前に人類が迫られている新たな選択、文明の進展にともなって見なおされるべき自然と人間の関係、積極的な未来への展望等々、現代人が当面する課題は数多く存在します。正確な情報とその分析、明確な主張を端的に伝え、解決のための見通しを読者と共に持ち、歴史の正しい方向づけをはかることを、このシリーズは基本の目的とします。

読者の皆様が、市民として、学生として、またグループで、この小冊子を活用されるように、願ってやみません。

暉峻淑子（てるおか・いつこ）
一九二八年大阪府に生まれる。
一九六三年法政大学大学院博士課程修了。
専攻は生活経済学。
現在、日本女子大学教授。
著書に『豊かさとは何か』（岩波新書）、『生活経済論』（時潮社）、『ゆとりの経済学』（東洋経済新報社）、『サンタクロースってほんとにいるの？』（福音館書店）ほか。

ほんとうの豊かさとは

——生活者の社会へ——

暉峻淑子

はじめに
先行き不安の日本
なんのためのお金か
ほんとうの豊かさとは
自分が自分の主人公に
教育を変えていく
生活者の社会へ

表紙デザイン・図表＝村田道紀／写真＝関戸勇

はじめに

戦後五十年を迎えて、これからの日本はどうしたらいいのだろうか、あるいは、それぞれの地域社会で私たちはどういう生き方をしていったらいいのだろうか。こういうことを考えるのは、ただ五十年という区切りの時期だからではありません。未来にわき立つような希望を感じられず、しかしこれまで通りではやっていけないという不安感を、人びとが抱いている時代だからではないかとおもいます。

国家五十年耐用説という言葉をきいた方がおありだとおもいます。

つまり、社会は五十年もたつと、戦争の教訓も忘れるし、経済も社会も制度疲労を起こし、あちこちが劣化したり腐敗したりする。それなのに、それを変革しようという創造的な思考も、エネルギーも出てこない。

硬直した社会の壁の前で、若者たちは無力感にとらわれ、自分たちが責任を負うべき社会に対して無関心になります。たとえば、今、政治にたいする言葉をもっている若者がどれだけいるで

しょうか。政治もまた生活の一部であるのに——。

これまでもうひとつの対抗勢力だった政治勢力や労働組合は、むしろ古きものにすり寄る形で自分の延命をはかろうとしているようです。もともと、支配的地位にいる人のほとんどは、古い制度の中で選ばれてきた人なので、古い制度がこわれれば、自分の地位も危なくなるのではないかと無意識のうちに考えています。ですから、自分の地位を失わないためには、古い枠組みを維持する中での変化しか考えないし、実行もしないのは、当然といえましょう。

つまり社会を変えていく力は、私たちひとりひとりの市民の中からしか出てこないのではないでしょうか。それは、生活の中にある矛盾やそら恐ろしさを日々暮らしの中で感づいている、ひとりひとりの人間の中からしか出てこないのではないでしょうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子どもや孫たちの未来を、希望あるものにしたいと願う私たちの中からしか生まれてこないのではないでしょうか。

多くの組織が硬直化している中で、市民運動に新鮮なエネルギーが絶えないのは、右のような理由があるからだとおもわれます。

生活の中から出てくる不安や要求は、生活の中のひとつひとつの事実と体験に根ざすものなので、ごまかしの理論では打ち消せません。たとえば宿題や学習塾に疲れた子どもの顔が生気を失っているとき、どう説明しても、親たちは「こんな教育でいいのだろうか」と心の中で悩んでいるのです。

私の話は、社会をどういう方向に変えていったらよいかという問題を、現実をどうみるか、というところから解いていこうとするもので、その問題をいろいろ深めてくださったり、実行してくださったりするのは、みなさまおひとりおひとりです。

私の話が何かの役に立てばうれしいです。

先行き不安の日本

モノとカネも危なくなる

日本の戦後五十年は、モノとカネをふやす五十年でした。豊かな日本になったということを否定する人はいません。それが平和のたまものであることを、否定する人もいません。

しかし、その豊かなモノとカネさえも危なくなってきているのが現在です。経済大国でモノとカネはあるけれども、なんとなく豊かな感じがしないといっていたのは、すこし前までのことで（じつはモノとカネが「豊かさ」に結びつかなかった経済のありかたこそが、現在の経済破綻を生んだ元凶でもあるのです）、就職不況の新卒者は不安のただ中にいるのではないかとおもいます。しばらくは、それらの若者を親が抱えこんだり、パートとという形で吸収するでしょうが、若者の未来を明るくするものではありません。新入社員の給与も二年つづけて、ほとんど上がっていません。

ここ諏訪は、あまり失業のないところだと聞いていますが、日本が失業のない国だといわれて

新規学卒者の初任給額の推移（産業計，企業規模計）

年	高卒 女	高卒 男	高卒 男女間格差（男＝100.0）	高専・短大卒 女	高専・短大卒 男	高専・短大卒 男女間格差（男＝100.0）	大卒（事務系） 女	大卒（事務系） 男	大卒（事務系） 男女間格差（男＝100.0）	大卒（技術系） 女	大卒（技術系） 男	大卒（技術系） 男女間格差（男＝100.0）
	千円	千円		千円	千円		千円	千円		千円	千円	
1980年	88.3	92.8	95.2	97.4	100.7	96.7	108.7	114.5	94.9			
1985	106.2	112.2	94.7	117.0	123.6	94.7	133.5	138.9	96.1			
1990	126.0	133.0	94.7	138.1	145.4	95.0	162.0	168.8	96.0	166.7	171.5	97.2
1991	133.2	140.8	94.6	146.5	155.1	94.5	171.2	177.9	96.2	176.3	181.7	97.0
1992	139.5	146.6	95.2	152.4	160.9	94.7	178.9	185.7	96.3	184.0	188.8	97.5
1993	142.4	150.6	94.6	155.6	165.1	94.2	179.6	188.9	95.1	189.5	192.6	98.4
1994	145.5	153.8	94.6	157.7	166.6	94.7	182.5	190.8	95.6	190.5	194.7	97.8

資料：労働省「賃金構造基本統計調査」

いたのはもう何年か前の話で、いまは失業率が三・二％になっています。そもそも日本の失業率は、現実の数よりずっと小さく出るといわれています（調査する一週間のうち、一時間以上働いた人は失業者に含まれません。しかも受けとった賃金額はどんなに低くてもよい。実際に失業していても過去一ヵ月のうちに求職活動をしていたと認められなければ失業者とはみなされません）。

また、私の勤めている日本女子大学では、女の子はいらないということで、女性の就職率は極端に悪いです。以前私は、男女共学の国立大学に勤めていました。現在教えている日本女子大の学生の方が能力において劣っているとはとうてい思えません。むしろ勝っているくらいです。

さらに、中高年をすぎた人の就職率は、もっと悪いです。管理職になった人たちまで平気で首を切られる世の中になりました。

日本は終身雇用の社会で、企業に忠誠をつくしていれば何らかの管理職になり定年までは勤めていられるのがふつうだったのですが、い

までは大きな会社でも管理職の人に肩叩きをしたり、リストラの対象にしたり、とても耐えられないような子会社に出ることを勧めて自発的に退職させる。こういうことがふつうになりました。ほとんどの企業が、定年前の勧奨退職の制度を持っています。

就職さえすれば年齢とともに月給が上っていき、定年までいられるというごく平凡な安心感は失われました。それだけではありません。

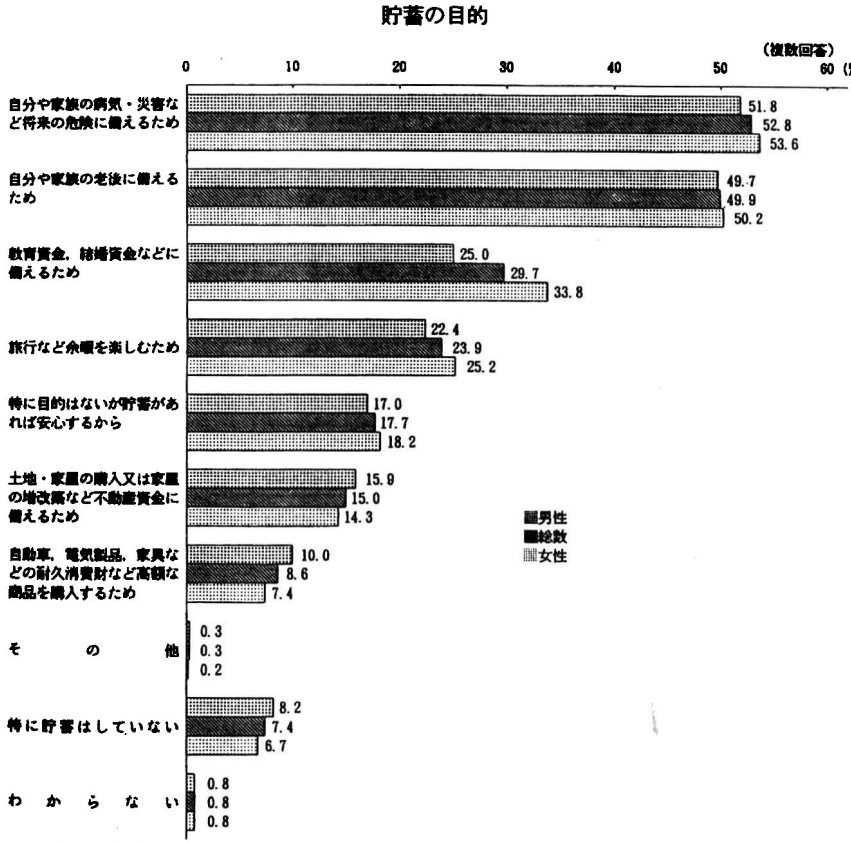
銀行の倒産

みなさまは、とくに高齢者の方は、退職金、あるいは年金などを銀行に預けていらっしゃるとおもうのですが、その銀行も危なくなってきた。銀行が危なくなるなどということは、戦後五十年考えられなかったことです。ここにも今までありえなかったことが起こっているといえましょう。いま東京の三つの信用金庫と兵庫銀行が倒産しています。それに対する救済を日本銀行や東京都がするといっていますが、国民の税金で無責任経営の穴埋めをすることに対する反対もたくさんあります。

いまはどの銀行がいちばん安全かということもわからない。それはご承知のように、各銀行がバブルのときに返済されるかどうかわからないところにお金をどんどん貸し付けた。売れないよ

うな土地、使いようなもない土地に、いままで通りに値上がりして大もうけできるとおもって投資をした。しかし土地は値下りしました。あるいは株式ですが、これまでは会社の業績と信用を基本に、配当金を受けとることを目的として、安全な資産として株を持っていた人が多かった。それが、株券を買っておけばともかく上がるんだという風潮に流されて、株の売買から差益を得る行動に変わりました。株という実体のない紙片から、ギャンブルのように利益が得られたため、いい加減な考えで株券をたくさん買った人が株の値下がりで大損した。つまり実体のない虚名に浮かれた、裸の王様のように裸になりました。預けておいた退職金も、一〇〇〇万円までは銀行が倒産しても預金保険で返ってきますが、それ以上のお金を預けている人には、何の保証もありません。一五〇〇万ぐらいの退職金をもらって、利子で、あるいは死ぬまでに少しずつ元金をとり崩して、年金の不足分を補って暮らしましょうとおもっていた人も、あしたどの銀行がどういうふうに倒れるか、ほんとうにわからない時代になりました。しかも銀行の安全性を判断する情報は一般市民に公開されません。

今年（一九九五年版）の家計調査では、退職した高齢者たちは、長い老後を年金だけでは暮らしていくことができず、年間、ほぼ平均一七万円ほどを貯金からひき出して暮らしています。利子率が現在時点で〇・六％ですから、年平均一七万円の利子を得るためには、約三千万円の貯金が



資料：総務庁

必要です。しかし、貯蓄動向調査によりますと、世帯主が六〇歳以上の世帯の二〇％は、六〇〇万円以下の貯蓄しか持っていません。六〇歳以上の世帯主の世帯は、今年（一九九五年）、貯蓄の減少率が最も大きく、前年にくらべて六・四％の減少になっています。

日本では、老後生活に対する社会保障がまだ不十分なので、医療や在宅ケアや老人住宅や老人ホームの施設などに、多くの自己負担があります。自助の精神を鼓舞してきた政府は、その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

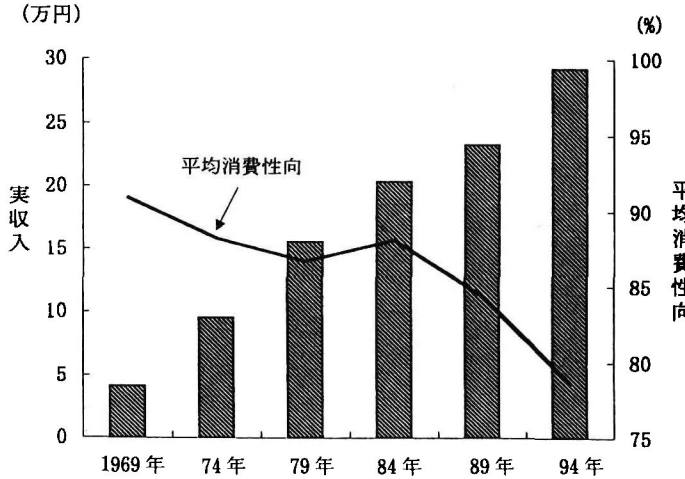
自助の成果を、無にしかねない現状に打つ手を見出すことができないでいます。利子率がゼロ同然になるとか、預けた退職金がタダになる銀行の破産――そんなことを、誰が予測したでしょうか。そんなになるまで過去によりかかっていた日本の経済力とは、何だったのでしょうか。

これまでは倒れそうな銀行は合併されて大蔵省がそれを助けるということもありましたが、もうそういうこともしていられなくなった金融の現状です。倒れそうな信用金庫をひきうけて合併してくれる銀行は、どこにもありません。そんな銀行を助けるために、史上最低まで利子率を下げました。安い利子は銀行からおカネを借りて投資する企業にとっても大きな利益です。預けている私たちにとっては、現在の利子率はないのも同じです。物価も下がっているから利子率が低くてもよい、という人がいますが、それは平均の消費者物価指数のことであって、交通費も、通信費も、社会保険の掛金も、子どもの授業料も上っています。私たち市民はバブル体質の中で実体のない高い土地代、マンション代を払わされ、その後、利子はタダ同然になり今度は破産した金融機関を税金で助けるという三重のツケを払っています。

カネとモノは豊かだとおもっていた夢も、いまはさめざるをえないでしょう。

産業の空洞化

1カ月平均実収入，平均消費性向の推移



資料：総務庁

若い人たちが就職しても、これまでのように年齢とともに月給も自動的に上がることはなくなるでしょう。いまは能力給といわれて、年齢に伴って月給が上がるのではなく、能力が伴わない場合は解雇されることもありうるということもふつうになってきました。

そればかりではありません。能力があっていっしょうけんめい働いても、円高によって会社が倒産したり、会社が海外に移転してしまったりして解雇されることも起こるでしょう。たとえば一ドルが一五〇円のときは、私たちは一五〇円でものをつくってアメリカへ輸出すれば、アメリカの人はそれを一ドルで買ってくれたわけです。ところがいまは一五〇円のものを一〇〇円か九〇円までコストを落として出さないと

アメリカではそれを一ドルで買ってくれない。

そうなると輸出で会社を立てていた企業は(日本ではそれが多いのですが、そして諏訪にもそういうところがたくさんあるとおもいますが)、立ちゆかなくなって倒産するか、結局人件費が日本の三分の一とか五分の一という東南アジアのうんと労賃の安いところに企業を移してしまう。そうするといくら勤勉に働いていても、この会社は企業ごとタイや中国に移った、ということになれば、国内で働く人は失業することになるわけです。つまり産業の空洞化です。自分の責任でないのに、人生の設計が崩れ、不安な未来が待っているのです。

それは時代が悪いという人がいるかもしれません。しかしそうではないとおもいます。モノとカネはあるけれども、豊かさがないといわれていたように、日本のモノとカネのつくり方がまちがっていたからここで頭打ちになって、とうとう断崖まできて、あとは谷底に落ちるか、それをどうやってかわしていくかというところにきた。いままでの日本のやり方がまちがっていたということが、いまになっていろいろな形で明らかになってきたということだとおもいます。

一九九五年版、家計調査の消費をみても、デパートの売り上げをみても、勤労者の賃金の調査をみても、そして貯蓄をみても、みな軒なみに下落しています。社会はしだいに底力を失ってきているのがわかります。

一般会計歳出予算主要経費別分類　（単位：億円）

年度	1989	1991	1993	1994
社会保障関係費	124,742	121,957	133,212	135,652
文教及科学振興費	50,753	55,627	64,557	58,937
国債費	120,898	155,366	142,125	136,056
恩給関係費	18,557	18,083	17,763	17,617
地方交付税交付金	149,647	158,002	139,498	120,687
防衛関係費	39,699	44,400	46,181	46,518
公共事業関係費	73,989	73,434	113,813	93,791
経済協力費	7,506	8,648	9,568	9,923
中小企業対策費	2,405	2,146	4,060	2,701
エネルギー対策費	5,461	5,893	6,750	6,708
食糧管理費	4,592	3,815	3,112	2,648
産投特会繰入等	13,000	13,000	38,621	35,641
その他事項経費	49,871	44,265	53,615	50,479
予備費	2,000	1,500	1,500	1,500
一般歳出合計	379,574	379,767	454,130	426,474
一般会計歳出合計	663,119	706,135	774,375	734,305

資料：「予算の説明」大蔵省より作成

モノをつくるやり方でなく

これからはやり方を変えなければいけないのに、まだ変えようとしないで、町おこしのために箱ものをいっぱいつくったり、地元の人がいらないと言っているのに、四国と本州の間に何本も橋をかけたり、道路をつくったり、土建屋さんを潤しておけば経済はひとりでに回復するという旧来の発想しかできないのでは、これから先もなお救いがないということでしょう。

土建業に国がどんなに私たちの税金をつぎこんでも、経済の波及効果はあらわれてきません。国債はどんどんふえて、誰がいつ返すのかと心配になります。

もっと根本的な、いままでと違う豊かさへの道すじを考えるべきではないのでしょうか。

社会に喜ばれる商売を

いままでのようにただつくって売ることだけを経済の活力にしていると、生産力がどんどん高くなって、たくさんのものが短い時間でつくれるようになれば、国内で余るのはきまっています。たとえば自動車だと国内で必要な自動車の二倍つくっている。そんな国は他にありません。二倍つくって国内でとても消費しきれない車をアメリカへ売ったり、ヨーロッパへ売ったり、オーストラリアやアジアに売っている。モノをつくって輸出し、お金を稼ぐことを経済の主流にしてしまうと、いずれ壁にぶつかる。国内にある国民生活の需要を再点検せずに、国外の市場でモノを売りさばくことばかりに目を向けているからです。あるいは輸出できるような文化や学術を国内で育成せず、モノつくりだけに国の財政を使っているからです。

国内でなぜモノが売れないか。それは同種のモノを、モデルチェンジするだけで売ろうとするからです。健康な生活の中からほんとうの需要が生まれる前に、生産者がつくったものを鳴物入りで、消費者に押しつけてしまう。

たとえばモノをつくるということではなく、創造性を育てる教育環境や、福祉事業、文化的な事業、学術的な研究条件、自然環境の回復、そういうところに投資を回す。モノがあふれてゴミ処理に困ったり、奇抜な宣伝でむりむりに買わせることがない、もっと社会全体の健康な生き方、

バランスの回復を考えてはどうでしょうか。

日本の戦後五十年はつくって売る以外のことについては、まったく知恵がなかった。このことがいま大きな問題になっています。経済大国日本が世界の人びとに喜ばれる何をいったい残しえたのでしょうか。世界史の中に日本の富が残した足あとを思うとき淋しさを感じるのは、私だけでしょうか。国内の需要を抑えこんでいる富の分配のまずさが、結局は相手の社会全体に喜ばれる商売をすることを不可能にしているのです。根はひとつなのです。

カネだけを見る日本の企業

私はウィーン大学にいたときに、ある縁があって、ここのところ難民キャンプの救援活動をやっています。

『信濃毎日新聞』でも呼びかけてくださって、長野の方からたくさんの衣類やその他のものを送っていただいたのですが、衣類、薬品、医療機械、いわゆる募金と現物の寄付を集めて、これを海外の難民キャンプに運んでいくわけです。

一回運ぶと薬やなんかでだいたい三〇〇キロ以上になる。ごぞんじのようにエコノミークラスで行くと二〇キロしか飛行機には積めません。それ以上のものは超過料金を取られる。超過料金

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com